

## 『私を創ってくれた3つの作品』

スペースデザイン部会員 大木 敦子

### 【作品 1】



『限りなく水は流れる』(2010年)  
第74回新制作展入選作品 (W90×H195)  
技法：織  
素材：ウール・リネン・レーヨン他

自然界で絶え間なく循環する水のイメージをコーディュロイ技法で表現した作品です。コーディュロイは浮いている緯糸をカットして仕上げるため、ベースの織の表情が見えてくるところが特徴で、織上がった時と仕上げ後のイメージが大きく変わります。その分、ハサミを入れる時の緊張感はなかなかのものです。織物でタペストリーを制作したのは久々だった作品。織の面白さは技法の制約の中にどれだけ自分の表現を盛り込めるかだと思っています。精緻なデザイン計画が必要である一方でどこかを崩して表現したいと思う葛藤の中で取り組んだ作品でした。無数にある織の技法の中でもようやく自分でコントロールができてきたと実感し、改めて織の魅力を感じた作品でした。

## 【作品 2】



『重ねた刻』(2012年)  
第76回新制作展入選作品 (W110×H170)  
技法：フェルト  
素材：ウール・ジュート麻

自然界にあって時間と共に変化するもの、失われていくもの、朽ちていくものに魅力を感じています。この作品はその時間の経過と表面の物質感をテーマに制作しました。この頃から技法を選ぶことよりも、自分の表現したいものにシンプルに向き合おうと考えるようになりました。フェルトは時に自由すぎて苦しむことがあるのですが、フェルトだからこそできる成型の方法や特徴があります。フェルトの表面を「削り取る」という行為自体が腐蝕されゆく物質の変化とリンクしているように感じ、作品に組み込みました。

【作品 3】



『追憶』(2021年)  
第84回新制作展入選作品(W180×H290)  
技法：織・フェルト  
素材：ウール

織とフェルトの組み合わせをしばらく続けて制作していましたが、素材にもう一度しっかり向き合うという事に立ちかえるようになりました。染める、紡ぐ、織る、フェルトにする。どの工程でも真剣に向き合えば向き合うほど、素材の魅力と時には難しさを発見し、改めて面白いなあと感じています。

## 大木 敦子 プロフィール

---

- 2002年 東京家政大学 家政学部 服飾美術学科美術専攻  
(現・造形表現学科) 卒業
- 2010年 新制作展 初入選  
( ' 11年を除き以降毎年入選)
- 2010年 テキスタイルアート・ミニアチュール展  
(以降5回出品)
- 2017年 個展 ギャラリー・イン・ザ・ブルー
- 2019年 新制作展 新作家賞受賞
- 2021年 新制作協会 会員推挙

他、グループ展など多数

現在 東京家政大学 家政学部 造形表現学科 講師